HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	月刊DRF 第50号
Author(s)	デジタルリポジトリ連合
Issue Date	2014-02-28
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/73603
Type	periodical
Note	事務局: 北海道大学附属図書館; http://drf.lib.hokudai.ac.jp/ で公開したもの
File Information	DRFmonthly_50.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

月刊 DRF
Digital Repository Federation Monthly

第50号
No. 50 March, 2014

【　報告　】平成25年度ワーキンググループ活動報告
【レポート】第５回SPARC JAPANセミナー2013
「アジアを吹き抜けるオープンアクセスの風―過去、現在、未来」
【レポート】「イーリサーチとオープンアクセス環境下における学術コミュニケーションの総合的研究」研究成果報告会
【レポート】近畿病院図書室協議会第132回研修会
「病院図書室における機関リポジトリの可能性」
【　連載　】いまそこにあるオープンアクセス 第5回 「大臣はゴールドがお好き」

平成25年度　ワーキンググループ活動報告

博士論文のインターネット公表で始まった平成25年。平均職歴10年以下（推定）の若い15人のメンバーが、１年間、文字通り突っ走ってきました。１年の活動を振り返って、主査、副査のコメントをお届けします。

ベルリン会議ではゴールド路線を優先しつつも、まだすべてがオープンアクセスになるまでの過渡期にある、と言われていました。また、博士論文や、研究データなど、多様な研究成果物のオープンアクセスを機関リポジトリで進めていかないといけません。私たちにはまだ多くの課題があります。これからも、いやこれまで以上に、力を合わせていきましょう。　　主査　三隅健一（北海道大学）

博論を通じてリポジトリの存在感が増していったことを実感する、今日この頃。だからこそ、目に見える形での活動が有意義なのでしょう。全国に数百名いるであろうリポジトリ担当のみなさま！知恵を振り絞り、体を張って、リポジトリ、オープンアクセスの発展に貢献していきましょう。一年間、ありがとうございました。
副査　阿部潤也（東京歯科大学）

ポストCSIの今年度はいろいろな変化もありましたが、全国ワークショップでは、会場からDRFの活動に対する期待の高さを感じました。機関リポジトリは、その存在が当たり前となりつつある今だからこそ、より多くのみなさんの声で、さらによりよいものにしていけるはずです。これからもご一緒にがんばりましょう。　副査　西薗由依（鹿児島大学）

活動記録

全国ワークショップ
DRF10「躍動するオープンアクセス」（第15回図書館総合展）開催

翻訳活動
研究評価に関するサンフランシスコ宣言（San Francisco Declaration on Research Assessment (DORA)）翻訳公開

国際連携
1) 国際会議「ETD2013」（香港）にて学位論文インターネット公表について発表
2) 国際オープンアクセスウィーク

技術サポート
1) junii2 ver.3.0の対応方法をDRFwikiに掲載
2) JaLCとの連携、DOI付与システムのリポジトリ導入を検討

情報提供
1) 月刊DRF発行
2) DRFwikiで学位規則対応まとめ公開

論文投稿
大学図書館研究98号「国際連携活動の実際とノウハウ -DRFの活動を通して」

平成25年度JAIRO Cloud 説明・講習会（国立情報学研究所）に協力

企画WGは、今年度のJAIRO Cloud説明・講習会に協力し、全国5会場（宮城、東京、愛知、兵庫、福岡）に10名の講師を推薦しました。講師は「機関リポジトリの概要」、「機関リポジトリの学内整備について」、「著作権について」、「コンテンツの収集について」などのコマを担当、受講生からは分かりやすかったという声も聞こえています。講師の皆様、おつかれさまでした！

第5回SPARC JAPANセミナー2013　レポート
「アジアを吹き抜けるオープンアクセスの風―過去、現在、未来」

2014年2月7日に第5回SPARC Japanセミナー2013「アジアを吹き抜けるオープンアクセスの風―過去、現在、未来」が行われました。今回はアメリカやヨーロッパではなく、韓国、中国、シンガポールからのゲストを招き、アジアのOA事情について発表がありました。

＜レポート：柴田育子（一橋大学附属図書館）＞

アジアのオープンアクセス事情

最初に千葉大学杉田茂樹氏から日本のOAの歴史の振り返りと、本セミナーの趣旨説明があり、続いて各国のOAの発表が行われました。

韓国KISTI（Korea Institute of Science and Technology Information）のChoi Honam氏の発表では、韓国はGold OAに力をいれており、国内雑誌のOA化等積極的に取り組みを行っているようでした。一方で、図書館員にはOAへの理解があるものの、上層部の理解不足、メタデータのOAI-PMHへの未対応や財政難等の課題が多く残されていました。

次に香港大学のDavid Palmer氏は、香港大学の“Knowledge Transfer”という概念のもとに生まれたサービスを紹介しました。IRだけでなく、研究者情報、出版情報、論文情報、基金情報が1つのインターフェースで検索、管理ができるシステムでした。また、中国全体では現在国レベルでOA推進が行われ、特に中国科学院がOAに熱心に取り組んでおり、2013年に初めて中国・雲南でIR会議が行われました。

KISTI
Choi Honam氏

香港大学
David Palmer氏

National University of Singapore Press
Paul Kratoska氏

大学評価・学位授与機構、DRFアドバイザー
土屋俊氏

一方で、National University of Singapore PressのPaul Kratoska氏が発表した、シンガポールをはじめとする東南アジアのOA状況は異なりました。そもそも東南アジア諸国ではOAは未だ確立しておらず、さらに研究者はOAよりも購読モデルのタイトルに論文を投稿する傾向があるとのことです。国や所属大学はトップジャーナルに掲載されることを強く望んでおり、研究費を国に期待する研究者にとっては、こういった購読誌への掲載が助成金の指標であるためです。また学問がSTM分野に偏りがちな東南アジアでは、HSS分野での母国語での研究発信が国内のみにとどまってしまう傾向が問題になっていると触れられました。

大学評価・学位授与機構の土屋俊氏は、世界に占めるアジアの投稿論文数を紹介し、今後アジアで生み出される論文は飛躍的に増えると述べ、「では一体誰がどのようにこの増え続ける論文の出版を負担するのだろうか？」と疑問を呈しました。「OAか否か」という選択の問題

はすでに古く、OAは実現可能なものとの前提で考えるべきだと述べ、今後図書館ができることは、IRを出版機能をもったプラットフォームと定義することではないか、と締めくくりました。

パネルディスカッションでは、冒頭に国立情報学研究所の尾城孝一氏が、日本が有数のIR大国であること、日本のIRのノウハウを他国に広めることも大事ではと話題提供を行いました。その後、筑波大学の加藤信哉氏をモデレータ、講演者をパネリストとしたディスカッションが行われました。

セミナーに参加して

セミナーが終了して、これまでOAの現状はヨーロッパや北米については沢山情報がありましたが、アジアに関してはよく知らなかったと気づかされました。発表では、アジアの中でも日本と同じような試みや実績がある国もあれば、まだまだという国もありました。一番印象に残った点は、これからOAが進む国は、これまで日本が辿ったような過程を歩むとは限らないということです。学術情報流通は刻々と変化し、ある有名な化学系雑誌では論文投稿数の半数近くがアジアからであるという話もあります。そういった状況で、今後アジアのOAは「どこ」で「どのように」発展していくのか、少なくとも多様な広がりを見せることは間違いなさそうです。

Kratoska氏の「我々は自国以外のアジアのOA事情を知らずにそれぞれ活動している」という発言がありましたが、パネルディスカッションでは今後は各国で連携したいと期待を込めた声もありました。そのためには、まずお互いのOA事情を知ることが第一歩ではないかと思います。

パネルディスカッションの様子

セミナーの詳細：
http://www.nii.ac.jp/sparc/event/2013/20140207.html

「イーリサーチとオープンアクセス環境下における学術コミュニケーションの総合的研究」研究成果報告会　レポート

東京が45年ぶりの大雪に見舞われた2月8日，標記の研究成果報告会が開催されました。様々な報告のうち，オープンアクセス（OA）に関する報告（利用や共有）を中心に紹介します。

＜レポート：武内八重子（千葉大学附属図書館）＞

第1部は生物医学分野のOAや一般人の専門情報（学術論文等）へのアクセスに関する発表でした。生物医学分野におけるOAの進展状況等をOA論文の件数により隔年で定点観測した調査では，2006～2010年には登録等の制限付きを含むOA論文の割合は12%ずつ増加したのに比べて2012年調査で2.3%に留まっていたことなどが報

告され，この分野ではOAが定着し安定期に入ったとの見解が示されました。

一般の人々の科学技術・医学情報へのアクセスに関しては3つの調査報告がありました。最初に，東日本大震災時における一般人の科学技術情報の探索状況に関して全国で2011年に実施した質問紙調査については，積極的に専門家のホームページなどの情報源を探索・利用するのは一部の人々であり，多くの人々はテレビの特集番組やサーチエンジンといった一般的な情報源を利用すること，回答者の半数弱を占めた「学術雑誌論文を読みたい」という人のうち，約7割が「日本語で無料であれば読みたい」と回答したことなどが報告されました。次に，一般人による健康医学情報の探索状況を明らかにするために全国で実施した質問紙調査報告では，2013年調査の速報値と前回2008年調査を比較した結果，2008年調査と変わらず全体の約半数（47.8%）が積極的に健康医学情報を探していました。情報源としてはインターネット（44.3→59.8%）が医師（57.0→56.5%）と並んで多く使われるようになっていました。続いて，「医学論文」を読んだ経験を持つ患者もしくは家族への，読み方に関するインタビュー調査の結果が報告され，患者やその家族が論文を読む動機は治療や診療に関する正確な科学的根拠や最新動向を知るためであること，データを読み飛ばすなど特徴的な読み方をしていることが示されました。

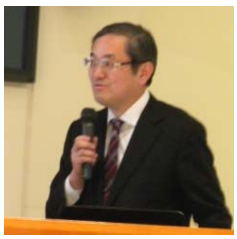
第2部では学術コミュニケーションについての興味深い発表が続きました。まずは，エルゼビアがボイコットを受ける背景等について，文献調査や引用分析，大学図書館への聞き取り調査をまとめた結果や，雑誌価格の値上げを巡って起きた具体的事例の検証などが報告されました。続いて，電子ジャーナルのビッグディールが日本の大学図書館に及ぼした影響について，予算構造，業務とサービス，大学図書館員の対応の点から学術情報基盤実態調査等を元にした分析と考察が示されました。次に，雑誌の暗黙の「ブランド（権威）」が「Nature，Science信仰」などと表現されることについて，世界の自然科学系研究者へのアンケート調査の解析結果等から，分野によってはこの2誌に限らないもののブランド力のあるトップジャーナル群が存在することが報告されました。

最後に，研究活動とデータ共有，学術コミュニケーションに関する研究者へのインタビュー調査のクラスタリング分析結果が報告され，研究者のデータ共有を中心とするデータへの意識や実践事例が様々であることが示されました。（口頭での発表はありませんでしたが，文献調査の報告でも同様の結果が示されています。）

最近は学術論文のOAだけでなく研究データの保存・共有への関心が高まっており，その調査研究や実践への取り組みが世界で始まっています。その過程では，このような研究者や利用者（研究者や一般人）のシステム的，心的環境の調査や分析をふまえて制度や仕組みを考えることが必要なのではないかと感じました。

平成23-25年度 科学研究費補助金 基盤研究(B)
研究課題番号23300089
研究代表者 慶應義塾大学文学部 倉田敬子
http://kaken.nii.ac.jp/d/p/23300089.ja.html

報告会プログラム
http://www.openaccessjapan.com/2013/12/post-153.html



左から順に、森岡倫子氏（国立音楽大学附属図書館）、松林麻実子氏（筑波大学図書館情報メディア系）、酒井由紀子氏（慶應義塾大学文学部）、國本千裕氏（千葉大学アカデミック・リンク・センター）、上田修一氏（前慶應義塾大学）、加藤信哉氏（筑波大学附属図書館）、林和弘氏（科学技術・学術政策研究所）、倉田敬子氏（慶應義塾大学文学部）

近畿病院図書室協議会
第132回研修会開催レポート

2月8日（土）近畿病院図書室協議会（以下、病図協）主催、DRF後援の第132回研修会を開催しました。テーマ「病院図書室における機関リポジトリの可能性」のもと、病院図書室で機関リポジトリを開設、運用することの意義や基礎知識を学びました。

病図協では、2012年に開催されたMIS29（第29回医学情報サービス研究大会）でのDRF主催パネルディスカッションに参加させていただいてから、病院刊行物の機関リポジトリの需要や必要性は認識しておりましたが、何から始めたら良いのか、果たして私たちにできるのか？という状態でした。研修会では機関リポジトリについての基礎知識、実現するための要件などが具体的にわかり、病院図書室でのリポジトリ実現に向けて大きく前進する機会になりました。

＜レポート：藤原純子（近畿病院図書室協議会研修部長/洛和会音羽病院図書室）＞

基調講演・事例報告

前半は基調講演と事例報告、リポジトリシステム導入とコストについて講義いただきました。

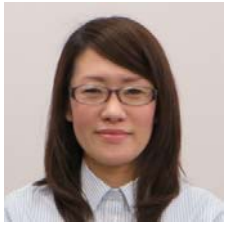
前田氏からは学術成果を公開することの意義、手段、機関リポジトリで公開することの意味を講演いただきました。機関リポジトリの論文を公開するだけではない大きな意義に、参加者の意識が一段と高まりました。

西本氏からは、担当者一人で機関リポジトリの開設、運営をされている立場から事例報告いただき、一人職場の多い病院図書室担当者に大きな勇気を与えてくれる内容でした。

和田氏は、同じ医学情報を扱う機関リポジトリ担当の経験から、特に個人情報やプライバシーについての事例をご紹介いただきました。

病図協での共同リポジトリを開設することを視野に、DSpaceの導入とランニングコストについて、福田氏からご紹介いただきました。

「機関リポジトリをする意味」
大阪大学附属図書館 前田信治氏



「機関リポジトリの開設と維持運営について
ー関西福祉大学リポジトリの事例ー」
関西福祉大学図書館 西本朱美氏

「医学情報とリポジトリ」
奈良県立医科大学附属図書館 和田崇氏

「導入＆ランニングコスト」
株式会社アグレックス 福田典雅氏

パネルディスカッション

後半は、前田氏を座長に会場からの質問に各講師が答える形でパネルディスカッションを行いました。会場からは運用について様々な質問が出され、参加者も前向きに機関リポジトリ開設を考えている姿勢が見られました。

まだまだクリアすべき課題はたくさんありますが、病院での機関リポジトリ実現に向けて、今後も積極的に学ぶ機会を作り、行動していきたいと思います。DRF参加館の皆さまからお教え頂くことが多々あると思いますが、どうぞご協力よろしくお願いいたします。

近畿病院図書室協議会　http://www.hosplib.info/

今そこにあるオープンアクセス　第5回

大臣はゴールドがお好き

Ministers prefer Gold

栗山　正光
首都大学東京学術情報基盤センター教授
デジタルリポジトリ連合アドバイザー
【ReaD & Researchmap】http://researchmap.jp/read0195462

STI Updatesなどでも既報の通り、オランダは2024年までにゴールド路線によるOAへ完全に移行することを方針として打ち出している。旗振り役を務めているのは教育・文化・科学省のサンダー・デッカー副大臣である。彼は1月21日付で、「出版物へのオープンアクセス」（Open Access to Publications）という文書を発表するとともに、1月28日、ヨーロッパ学術出版会議（APE 2014）で「ゴールドへ行く」（Going for Gold）と題する講演を行っており、その映像がYouTubeで見られる。

若き副大臣が、インターネット上の情報資源を活用して膵臓がんの画期的な検査法を発明した15歳の少年ジャック・アンドレイカを例にあげて、オープンアクセスは道義的な義務であるばかりでなく社会の発展に不可欠だと熱弁をふるうさまは、素直に見れば感動的だろう。

さらに、デッカー副大臣はゴールドOAの優位性を主張して、グリーンOAを四位入賞にたとえる。もちろん立派な成績だ、しかし「金」を狙う人にとっては満足できるものではない（まったくの偶然なのだが、日本人としては高梨沙羅選手を思い浮かべざるを得ない）。ただし、彼がグリーンOAの欠点としているのは、エンバーゴがあってすぐに公開されないとか、あちこちのリポジトリに分散していて探すのが大変だとか、原稿の質が疑問だとかいった、グリーンOA擁護論者からは、一応、反論が用意されているものばかりである。

ともあれ、副大臣はゴールドOAが簡単に実現するものではないことを認め、関係者の結束を呼びかける。ソチ・オリンピックにかけて、「参加することが勝利より重要なのではない。参加することが勝利なのだ」と締めくくって拍手喝采を浴びる。

一方、カレントアウェアネスでも紹介されているように、ゴールドOA路線の本家（？）イギリスでは、フィンチ・レポートで提言された公共図書館で学術文献を提供する「研究へのアクセス」（Access to Research）プロジェクトが2月3日から開始された。これ自体については、当然、賛否両論あるのだが、ここで注目したいのは、同日付け『タイムズ・ハイアー・エデュケーション』の「出版社が図書館に学術雑誌の無料アクセス提供開始」（Publishers launch free journal access for libraries）という記事である。

この中に、「ロンドンの図書館で『人目を引く』開始イベントがデイヴィッド・ウィレッツ大学・科学担当大臣出席のもとに行われる」という部分がある。ウィレッツ大臣は、STI Updatesでも報じられたが、フィンチ・レポート1周年のレポートに対して感謝の書簡を主査のジャネット・フィンチ教授に送り、その中でゴールドOA優先路線堅持を明言している。この図書館でのイベントへの参加も、その政策の一環であるプロジェクトのPRが目的だろうが、うがった見方をすれば、人気取りのパフォーマンスと言えなくもない。

どちらが票になるかと言えばやはりグリーンOAよりゴールドOA、と言ってしまうと身も蓋もないが。

次号予告：平成26年度DRF大計画 & SPARC 2014 Open Access Meeting レポート

月刊DRFでは、皆さまからのお便りをお待ちしています。
gekkandrf@gmail.com

○読者アンケート ご協力ください。
http://drf.lib.hokudai.ac.jp/gekkandrf_inq.html
○Facebook
http://www.facebook.com/DigitalRepositoryFederation

○編集後記
遂に50号。次は100号を目指して頑張ります。2018年には、平昌オリンピックの高梨沙羅選手金メダルと、月刊DRF100号をお祝いしましょう！（三三木）

月刊DRF第50号　平成26年2月28日発行　デジタルリポジトリ連合　http://drf.lib.hokudai.ac.jp/drf/index.php?月刊DRF